

教 学 の 手 引 き

2011

人文総合科学インスティテュート
総合プログラム

文学部

Table of Contents

人文総合科学インスティテュート 総合プログラム

I 人文総合科学インスティテュート総合プログラム 教学紹介

① 教学理念・目標	3
② 総合プログラムでの学び方	3
③ 研究入門の学び方	9
④ レポート・小論文の書き方	9
⑤ 参考文献	11
⑥ 卒業論文（非卒業論文形式含む）の提出について	16

II 科目一覧と履修方法

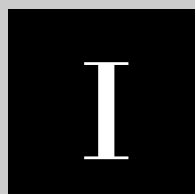
① 科目一覧	18
② 履修方法	18

「教学の手引き」の使い方

「教学の手引き」は、専攻・プログラムにおける皆さんの学びの指針となるものです。
毎年配布される履修要項とあわせて、履修に役立ててください。

この「教学の手引き」は、皆さんが卒業するまで使用するものです。
再配布はしませんので、大切に保管してください。

記載内容に変更・追加がある場合は文学部ホームページ（URL：http://www.ritsumeijp/lt/lt07_j.html）や掲示で随時発表しますので、定期的に確認をしてください。



人文総合科学インスティテュート
総合プログラム 教学紹介

1 教学理念・目標

人文学への総合的アプローチとは

現代社会は日々、新たな変革をとげながら、常に新しい姿を見せています。人間と社会をとらえる学問も、複雑に変容する社会に対応し、ますますその幅を広げ、深さをきわめつつあります。

このように複雑に変容する社会とそこに生きる人間を理解するには、学問領域を自由に横断しながら、複数の視点から事象をとらえることが必要です。

人間と社会を総合的に理解するため、人文学を幅広く学び、複数の学問手法と視点からアプローチする——それが総合プログラムのめざすものです。このアプローチによって、従来のディシプリンという概念とは違った新しい知を開発し、複眼的に対象を捉えると同時に、これまでの分野の境界にとらわれない新たな主題の発見に取り組みます。

総合プログラムの人材育成目標

こうした理念を具体的に展開したものととして、総合プログラムの学生が4年間の学びを通じて養う能力の具体的な目標を以下のように設定します。

- ・人文学の諸分野の基礎、各分野の発想や研究方法の特徴を理解する。(知識・理解)
- ・人間や社会の問題について、複数の視点から考察し、自分自身の見解や主張を持つことができる。(思考・判断)
- ・既成の学問領域の枠を超えて、新たな研究・考察の主題を探究することができる。(関心・意欲)
- ・自分自身の主張や論理を批判的に検討し、つねに異なった視点の可能性を視野に入れる。(態度)
- ・論文だけでなく多様な制作物等を視野に入れて、調査・研究の成果の内容にふさわしい形式を選択し、表現することができる。(技能・表現)

2 総合プログラムでの学び方

総合プログラムでは人文学を幅広く学ぶのが特徴ですが、学修を進めるにあたっては、単にあれもこれもというのではなく、自ら目標を定め、計画性を持つようにすることが大切です。総合プログラムに入学してくるみなさんの関心のありようはそれぞれ違います。このため、総合プログラムでは全員が必修として学ばなければならない科目は少なくしています。それだけに、自分で学びの設計をすることが肝要です。1回生は人文学5領域を広く学び、2回生で分野を絞りこんでより深く学び、3回生からは自分の学びの設計にしたがって履修科目を考えていきます。

(1) 1・2回生での学修

学修計画の概要

1・2回生では、以下の3つの点を重視して学修します。

人文学諸分野の総合的学修

1回生では、総合プログラムで開設している「人文総合科学研究入門」をつうじて大学での学び方を身につけ、「人文総合科学概説Ⅰ・Ⅱ」で人文学5領域にわたってその基礎を学びます。2回生では、「人文総合科学基礎講読Ⅰ・Ⅱ」で5領域のうちから2領域を選び、より深く学びます。

外国語運用能力

英語をはじめとする外国語の運用能力を徹底的に鍛えます。人文学の学修に不可欠な文献の読解能力を「英書講読入門Ⅰ・Ⅱ(1回生)」で、読解にとどまらない運用能力を外国語の授業(1～2回生)で学修します。

情報処理能力

人文学における研究にも情報処理能力は必要不可欠となっています。総合プログラムでは、1回生時は文学部1回生全員が受講する「リテラシー入門」で、2回生時は総合プログラムおよび国際プログラムだけの科目「人文総合科学情報処理Ⅰ・Ⅱ」で学修します。

① 1 回生

分野	学 修 の 内 容
人 文 学 の 学 修	<p>人文総合科学研究入門</p> <p>総合プログラム1回生が学ぶ、もっとも基本的な授業です。人文学における題材を幅広く、柔軟に扱いつつ、高校での「勉強」から大学での自律的な学びへの橋渡しを行います。教員による講義形式の授業で学びへの手ほどきを受けるとともに、小集団クラスの特性をいかし、ライティング、討議、発表を通して、考えを明確に、わかりやすく伝えるプレゼンテーションの力を養います。なお、この授業には「フィールドリサーチ系」の内容も組み込まれています。これは本来、「人文総合科学概説」で扱うべき内容ですが、小集団での活動が必要なため、本授業に組み込まれているものです。</p>
	<p>人文総合科学概説Ⅰ・Ⅱ（コア科目）</p> <p>「人文総合科学研究入門」と並ぶ、総合プログラム1回生を対象とした基幹科目です。人文学の各領域をリレー講義形式により人文学各領域の基礎を学びます。ただし、C領域「フィールドリサーチ系」は小集団での活動が必要なため、「人文総合科学研究入門」に組み込まれています。</p>
	<p>A領域：表現文化系</p> <p>文学や芸術など、文化的な表現を研究対象とした領域です。文学部の専攻では、日本文学、中国文学、英米文学などがこれに該当します。</p>
	<p>B領域：文書史料系</p> <p>主として文書や史料にもとづく研究を行なう領域です。文学部の専攻では、日本史学、東洋史学、西洋史学などがこれに該当します。</p>
	<p>C領域：フィールドリサーチ系</p> <p>机上の資料だけではなく、フィールドでの調査にもとづく研究を行なう領域です。文学部の専攻では、日本史学考古学コース、地理学がこれに該当します。</p>
<p>D領域：行動科学系</p> <p>人間の行動を研究対象とした科学的アプローチを主とする領域です。文学部の専攻では、教育人間学、日本文学（日本語学）、英米文学（英語学）、心理学がこれに該当します。</p>	
<p>E領域：メタ思考系</p> <p>人間の思考と行動、人間をとりまく自然界・社会的世界の本性やたがいの関係について、過去の思想を参照しながら、理論的に考察する領域です。文学部の専攻では哲学などがこれに該当します。</p>	
<p>各専攻・プログラムの1回生担当専門科目</p> <p>各専攻・プログラムにある1回生専門科目は、それぞれの学問領域を初めて学ぶ学生のための入門的な講義となっています。積極的に受講して、人文学の各分野での基礎作りに励んでください。各領域に対応する推奨科目は以下のとおりです。1回生ではなるべく多くの分野に接して欲しいので、各領域1科目は受講するようになりたいものです。具体的な内容はオンラインシラバスを参照しましょう。（人文：人文科学総合講座）</p> <p>A領域：日本文学概論Ⅰ・Ⅱ、中国文学概論Ⅰ・Ⅱ、英米文学概論Ⅰ・Ⅱ、英語表現概論、アジアの文学（人文）、英語文学（人文）</p> <p>B領域：日本史概説Ⅰ～Ⅷ、日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ、東洋史概説Ⅳ・Ⅴ、西洋史概説Ⅰ～Ⅴ、史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）</p> <p>C領域：考古学概説Ⅰ・Ⅱ、人文地理学概論Ⅰ・Ⅱ、自然地理学概論Ⅰ・Ⅱ、地誌（日本）Ⅰ・Ⅱ、地誌（世界）Ⅰ・Ⅱ</p> <p>D領域：日本語学概論Ⅰ・Ⅱ、英語学概論、心理学概論Ⅰ・Ⅱ、言語学Ⅰ・Ⅱ（人文）</p> <p>E領域：哲学概論Ⅰ・Ⅱ、倫理学概論Ⅰ・Ⅱ、宗教学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）</p>	
<p>その他、自主学修について【重要】</p> <p>総合プログラムに所属するみなさんの場合、幅広い学修をする反面、他専攻の学生に比し、どうしても特定分野の知識の深化に欠ける面が否めません。しかし、それは個々の自主学修で充分埋め合わせることが可</p>	

分野	学 修 の 内 容
人文学の学修	<p>能です。各領域の推薦図書を「⑤参考文献」に記載していますので、1年間に少なくとも各領域2冊程度は読むようにしてください。人文学を学ぶ上で、文献の講読は必要不可欠です。授業だけが学修ではありません。むしろ、授業で得た考え方や疑問、喚起された興味や関心について自ら調べて、自ら考察することこそが大学における学修といえるでしょう。特に総合プログラムに所属するみなさんには自ら学ぶ習慣を身に付けることが重要です。自主学修で積極的に様々な文献を読む習慣を身に付けるようにしてください。</p>
外国語	<p>英書講読入門Ⅰ・Ⅱ</p> <p>どの学問分野を目指すにせよ、英語の読解能力は必要不可欠です。総合プログラムでは専門科目として英書講読入門Ⅰ・Ⅱを開設しています。これは人文学に関連する文献を講読する授業で、全員必ず受講しなければならない登録必修科目です。前期で「Ⅰ」を、後期で「Ⅱ」を受講します。</p> <p>第1外国語・第2外国語</p> <p>文学部共通で、1回生時に第1外国語、第2外国語をそれぞれ6単位ずつ受講します。総合プログラムの場合、第1外国語か第2外国語でかならず英語を選択しなければなりません。</p>
イ ン グ デ ミ ッ ク ラ イ テ	<p>リテラシー入門（コア科目）</p> <p>文学部共通の科目で、文章作成能力（アカデミックライティング）および情報リテラシーの基礎を養成する科目です。アカデミックライティングでは年間3回テーマを定めてレポートを課すなどします。情報リテラシーでは、実際にパソコンを使用しながら基本的な利用方法と文書作成の実習します。登録必修科目で必ず受講しなければなりません。教養科目として認定されます。</p>

* 上記以外にも、1回生から教養科目の履修を進めなければなりません。

② 2 回生

分野	学 修 の 内 容
人文学の学修	<p>人文総合科学基礎講読Ⅰ・Ⅱ</p> <p>1 回生時に学んだ人文学5領域のうち異なった2領域を、前後期各1領域ずつ受講します。各担当者の準備した教材に基づいて研究発表を行い、人文学に要求される研究能力・プレゼンテーション能力を鍛えます。あわせて、3回生進級時のゼミ選択に備えて、自分の適性を最終的に確認します。</p> <p>各専攻・プログラムの専門科目</p> <p>この段階になると、かなり興味や関心が定まってきたと思います。その分野の専攻の1・2回生専門科目を中心に履修すればよいでしょう。2回生配当で特殊講義が開設されている専攻もありますが、1・2回生の間はなるべく概説や概論と呼ばれる科目を多く履修するのが良いでしょう。</p> <p>また、2回生の中に、どのような人文学の学問的手法を身につけようとするのか、よく考えるようにしてください。例えば、歴史的アプローチ、地理学的アプローチ、文化的アプローチ、などが代表的なものとしては考えられます。マスターすべき学問手法は何か、常に考えるようにしましょう。</p>
外国語	<p>人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ</p> <p>1回生の「英書講読入門Ⅰ・Ⅱ」で学んだ英語読解力をさらに伸ばすことを目的とした科目である。登録必修科目で必ず受講しなければならない。基本的には英語文献の講読を受講することを推奨するが、希望の進路によっては他の言語による文献の講読を選択することもできる。</p> <p>第1外国語</p> <p>文学部共通で、第1外国語に英語を選択した場合は「英語Ⅶ・Ⅷ」を、初修外国語を選択した場合は「○語・応用」を受講することとなります。</p>
情報処理	<p>人文総合科学情報処理Ⅰ・Ⅱ</p> <p>1回生時に「リテラシー入門」で学んだ情報処理の基礎を、本科目でさらに伸ばします。この科目は登録必修科目で必ず受講しなければなりません。教養科目として認定されます。</p>

(2) 3・4回生

① 3・4回生

総合プログラムのみなさんは、3回生進級時に他専攻・プログラムに異動するか総合プログラムを継続するか選択します。ここでは継続した場合の学修について解説します。他の専攻・プログラムに異動した場合の学修内容については、各専攻・プログラムの「教学の手引き」を参照してください。(文学部のウェブサイトで閲覧できます。)

分野	学 修 の 内 容
人 文 学 の 学 修	<p>ゼミ (演習)</p> <p>総合プログラムを継続した場合、ゼミ (演習) として「テーマリサーチ型ゼミナール」を履修することとなります。テーマリサーチ型ゼミナールは、他専攻にある伝統的な人文学の学問分野に区分されたテーマを扱うのではなく、人文学の学際 (複数の学問分野に関わる研究) 的で新しいテーマを取り扱うゼミナールです。テーマリサーチ型ゼミナールは、専攻やプログラムにかかわらず学生を積極的に受け入れる活気あふれる演習です。2011年度のテーマは次のページにあるとおりです。テーマは年度ごとに変更されます。</p> <p>文学部にとって、ゼミは非常に重要な位置を占めています。ゼミの学修を通じて最終的には4回生時に「卒業論文」を作成し、その「卒業論文」が大学における4年間の学修の集大成と位置付けられているからです。テーマリサーチ型ゼミナールでは、「卒業論文」という形式のほか「卒業制作」に取り組むことも可能です。どのような形態であるにせよ、その重要性に変わりはありません。3回生時から4回生時に作成する卒業論文、卒業制作をイメージして、演習に取り組むようにしてください。</p>
	<p>各専攻・プログラムの専門科目</p> <p>3回生での専門科目の学修は、演習に関連した科目を履修するように心掛けてください。特に、取り扱うテーマの関連性だけでなく、その取り組む学問的手法を意識して学修に取り組んでください。言語学的アプローチを取るなら日本文学専攻、英米文学専攻の日本語学、英語学の関連の科目や心理学の関連科目を履修するのも良いでしょう。歴史学的アプローチなら、日本史・東洋史・西洋史の史学史や学際プログラムの歴史人類領域の諸科目も良いと思われます。演習担当の教員によく相談してください。</p> <p>また、人文科学総合講座の「外国文化講読 (通年4単位)」は学部共通の登録必修となっていますので、忘れずに履修しましょう。第1外国語のものを選択することとなります。</p>
	<p>人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ</p> <p>3回生時の「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。外国語による文献講読ですが、内容は、人文学の諸領域に関連するもので、みなさんの人文学の学修に大いに寄与するものです。学際プログラムが中心となって運営している科目です。</p>
	<p>外国文化講読</p> <p>2回生までの外国語学習で培った基礎的学力のグレードアップを図ると同時に、各言語圏の文化事情に対する認識と理解を深めることを目標とする科目です。テキストの講読が基本ですが、演習形式あるいは講義形式を加味した授業形態をとります。第一外国語とした語種の授業を履修します。登録必修科目です。</p>

② テーマリサーチ型ゼミナール

総合プログラムを継続した場合、ゼミナール（演習）として「テーマリサーチ型ゼミナール」を履修することになります。テーマリサーチ型ゼミナールは、他専攻にある伝統的な人文学の学問分野に区分されたテーマに収まらない、複数の学問分野にひろがる新しいテーマを取り扱うゼミナールです。テーマリサーチ型ゼミナールは、すべての文学部学生が志望することができ、いろいろな専攻やプログラムの学生が、それぞれの学びの基本を生かしながら、ゼミナールのテーマに取り組みます。それぞれのゼミナールの開講期間は数年で、毎年度、新規に開講するゼミナールと閉講するゼミナールがあります。

2011年度テーマリサーチ型ゼミナール開講テーマ一覧（3回生ゼミのみ掲載・テーマは年度ごとに変更されます。）

テーマ
道具の研究
奄美・沖縄の文化に学ぶ
中国映画から現代中国の文化を考える
地中海世界の歴史と文化
世界の文化と多言語多文化社会における共生
THEMES IN ASIAN STUDIES
京都の年中行事と文学
意識の人間学（心の人間学）
説き方の表現と教育心理学

3・4回生時、とくに3回生時に重要なのが、ゼミナールのテーマを追究する上でベースとなる諸分野の知識の習得に努めることです。テーマリサーチ型ゼミナールを選択した場合は、そのテーマとかかわりのある講義科目をあわせて履修し、統一した学び方をすることが望まれます。

<代表的な卒業論文の論題>

テーマリサーチ型ゼミナール

《テーマリサーチ型ゼミナール》卒業論文形式

- 京都と観光～リピーターを獲得するような修学旅行の提案を目指して～（京都から発信する）
- 祇園祭を彩る景観色彩～景観を守る企業努力～（京都から発信する）
- テキストとしてのマンガ論（他者問題と文化理論）
- 対話的コミュニケーションの地平：薄れゆくわたしの主体性に（他者問題と文化理論）
- 竹久夢二の女性観（ジェンダーと文化）
- 沖縄女性はどう語られてきたか―女師―高女における服装を中心として（ジェンダーと文化）
- 中国漢字の簡略化問題（現代中国文化圏の現在と中国語）
- 年画と浮世絵による文化比較（現代中国文化圏の現在と中国語）

《テーマリサーチ型ゼミナール》卒業制作形式

- 留学生のための『日本事情入門』テキストの制作（アジアにおける日本研究）
- マルチメディア視聴覚英語教材の制作（英語（言語）教育とグローバリゼーション）
- 日本全国方言プロジェクト：テキストと音声による資料収集と公開（英語（言語）教育とグローバリゼーション）

3 研究入門の学び方

(1) 研究入門とは

「研究入門」は、どの専攻・プログラムでも1回生から4回生のゼミ・卒業論文作成に至る4年間のカリキュラムの第一歩に位置付けられる重要な授業です。これまでも何度も述べましたが、総合プログラムでは人文学の多様な学修を通じて、複眼的・総合的な知識や視野を獲得することを目的としています。この「研究入門」では、その多様な人文学の学問的手法、誤解を恐れずに簡略化して言うところの“物事に対する見方・考え方、アプローチの方法”を学びます。ここで誤解して欲しくないのは、研究入門で学ぶことはあくまで「考え方」であって、「知識の習得」は目的としていない、という点です。これが高校までの学習方法と大きく異なる点です。では、知識はどこで身に付けるかということですが、通常の専門科目の講義でもよいでしょうが、特に重要なのが本を読むことです。人文学の学問分野に属する図書は、それこそ星の数ほどありますが、まず1回生時で読んでおいて欲しい図書は推薦図書として「[5](#)参考文献」に記載しています。可能な限り読むようにしてください。大学では、特に幅広い分野を学ぶ総合プログラムでは、自主的な学修が肝要なのです。

(2) 研究入門の内容

「人文総合科学研究入門」は総合プログラム1回生が学ぶ、もっとも基本的な授業です。人文学における題材を幅広く、柔軟に扱いながら、高校での「勉強」から大学での自律的な学びへの橋渡しを行います。教員による講義形式の授業で学びへの手ほどきを受けるとともに、小集団クラスの特徴を活かし、ライティング、討議、発表を通して、考えを明確に、わかりやすく伝えるプレゼンテーションの力を養います。

授業はひとつのクラスを3人の教員で担当します。このうち、ひとり「フィールド・リサーチ系」の授業を5回担当します。人文学各領域は「人文総合科学概説Ⅰ」「人文総合科学概説Ⅱ」で学びます。しかし、「フィールド・リサーチ系」は小集団での活動が必要なため、本授業に組み込まれています。

「人文総合科学研究入門」と「人文総合科学概説」はふたつでセットになって学ぶよう構想されています。「研究入門」では高校での学習から大学での自律的な学びへの手引きとなるよう、人文学の一般的な題材を扱いながら、「学ぶ」とは何かを学びます。それとともに、人文学の各領域は「概説」で学びます。「研究入門」では学び方を、「概説」では学びの対象そのものを扱います。

「研究」ではとりわけ、次のような力の養成をめざしています。

- (1) 基本的な図書を探索し、必要な情報を読み取る力を。
- (2) みずから課題を設定し、問題解決のアプローチを考える力。
- (3) 発表を正確に理解するだけでなく、みずからも明確に、わかりやすく発表できるプレゼンテーションの力。
- (4) オリジナルな知見を、明確に、わかりやすく文章として書く力。

4 レポート・小論文の書き方

文章を書く力は知の大きな柱です。私たちは書きながら考え、考えながら書きます。書くことと考えることはコインの裏表です。書くことで思考は鍛えられ、思考は現実のものとなります。総合プログラムでは書く力を育てることをとりわけ大切にしています。それは書く力が学ぶ力を支えているというだけでなく、卒業後、みなさんが社会の各分野で活躍するとき、大きな力となると考えるからです。

(1) レポートと小論文

レポートと小論文はどちらも大学では学習の一環として課される、あるいは試験に代えて達成度を測るために課される課題作文のことで、レポートと小論文についての明確な定義はありません。人によって同じ意味で使う人もいれば、区別して使う人もいます。

このようにその意味が明確でないのは、その成り立ちに原因がありそうです。「レポート」ということばは和製英語です。英語のreportはできごとや活動を説明した「報告」のことで、授業で提出する課題はpaperとよびます。ペ

ーパーはある主題について実証的に論じたもので、学術論文の形式にのっとったものを指します。「小論文」は入試などで課される課題作文という意味で使われるようになったのがその始まりです。これはかなり最近、教育界で使われるようになったことばで、国語辞典にもまだ記載はありません。英語では授業で提出する課題作文のことを essayと言います。これはペーパーほど厳密ではないものの、ある主題について実証的に論述したものを指します。私たちが小論文とよぶものは英語のessayにほぼ相当します。

(2) 文章には目的がある

どのような文章にも目的があります。その目的は大きく、「読者を楽しませる」「読者を説得する」「読者に知識を伝える」という3つに分けることができます。物語や随筆などは文章を読むことそのものを楽しみがあります。これは読者を楽しませる目的で書かれたものです。広告や選挙公報の文章は読者になんらかの行動を起こさせる目的で書かれています。新聞や雑誌の記事、大学で教科書として読むような本は知識を伝えるのが目的です。また、知識を伝えながら説得するというふうには、複数の目的が重ねて使われる場合もあります。

レポートと小論文の目的は知識を伝えるところにあります。レポートも小論文も単に自分の思いを述べた作文ではないという点が大切なところです。文章がいかにおもしろくても、主張に熱がこもっていても、知識を伝えていなければレポート、小論文とはよべません。正しく、わかりやすく、切れ味鋭く知見を伝えるのがレポートと小論文の役目です。

(3) 新たな知見

レポート、小論文が伝える知識は新たな知見でなければなりません。私たちが文章を読むのはそこに新たな知見があるからです。「日本国憲法の大きな柱のひとつは平和主義だ」というのは私たち共通の知識です。しかし、このことをそのまま書いてもレポート、小論文とは言えません。だれもがすでに知っている内容をあらためて文章化しても、それを読もうとする人はいないでしょう。読者に読ませるためには、読者の目を開かせる新しい知見がなければなりません。たとえば、軍隊を持たないコスタリカの憲法と比べて論じれば、日本国憲法は世界的に先進的な内容をもつ憲法で、「その第9条は世界の人々から高く評価されている」という知見を展開できるでしょう。

この新たな知見というのは「大発見」がなければ小論文ではないという意味ではありません。小論文の小論文たるゆえんは、そこに小さくてもきらりと光る新しい知見があるということです。小さなことではあっても、そこから大きく広がる可能性をもった知見を探ることが大切です。

(4) 実証性

小論文が小論文として成立するためには、新たな知見のほかに実証性がが必要です。実証性とは単なる思いつき、主観ではなく、証拠立てて、だれもが納得できるように論議をすることです。これは小論文と感想文を比べてみるとよくわかります。

感想文には実証性は求められません。映画を見ての感想、本を読んだ感想、旅行をしての感想、どれも人によって異なります。同じグループで旅行をして、その感想文を書けばみんな内容は違っているでしょう。明媚な風光に心動かされた人、その土地の食べ物に思い出を残した人、仲間とおしゃべりが一番楽しかった人などさまざまです。そのうちのどの感想が正しかったのかと問うのは意味のないことです。感想は主観的であることがゆえに感想です。

これに対し、学術的なペーパーとよばれるものはその実証性が身上です。豊かな日本でホームレスとよばれる人々に代表されるように貧困に苦しむ人々が数多くいます。なぜ豊かな社会で貧困に苦しむ人々が存在するのか。それに対して、「家族制の崩壊が原因だ」「競争社会の悲劇だ」「怠け者だからだ」などと意見を言うことはできます。しかし、それは感想に過ぎません。ホームレスとよばれる人々は以前から存在したのか、いつから増えたのか、その背景は何だったのか。これは感想では解決できません。現代日本の社会構造の変化を緻密に調べ上げ、場合によればホームレスの人々に面談しながらその背景を突き止めていかなければなりません。つまり、実証によってあきらかにしていかなければなりません。この実証性こそが学術の身上です。

(5) 分野によって異なるアプローチ

人文科学は広い領域で、扱う対象が多岐にわたります。文献、史料をもとに研究を行う表現文化系、文書資料系であっても文献、史料の見方、扱い方には違いがあります。文学では文献に表れた表現、内容そのものが研究対象となるのに、歴史ではその裏にある事実を見ようとします。心理学、言語学のような行動科学系では数値化されたデータをもとにモデルを構成するという手法がよく使われます。一口に人文科学とは言っても、その手法には大きな

違いがあります。

このため、人文科学においては実証性へのアプローチに大きな違いがみられます。表現文化系ではその研究手法のなかに「データ」ということはあまり出てきません。行動科学系のアプローチには逆に「作品を読む」という言い方はまず出てきません。同じ学術的実証性を志向してはいても、そのアプローチには大きな違いがあるのです。ペーパーの書き方にも分野により違いがあります。言語という同じ分野について見ても、英語で書く場合には文学系では現代語協会というところが定めた書式で書きます。しかし、応用言語学系ではアメリカ心理学会が定めた書式で書くことが一般的です。このふたつの書式はペーパーの構成、書誌情報の記載など大きく異なっています。人文科学系それぞれの分野の教員の指導にしたがって書き方を学んでください。

(6) 良質の文章を読む

私たちの書く力は読む力を超えることはできません。一般に文章を書いた後はしばらく時間をおいて読み直し、推敲を行います。書く力より読む力の方が高いので、自分で書いた文章であっても、読んでみると、その欠陥がよく見えてきます。このため、書いた文章は自分が読者となって推敲できるのです。

書く力を高めるためには読む力を高めなければなりません。このためには良質の文章をたくさん読み、深く考える努力を重ねることが必要です。また、そこからわかりやすい、切れ味鋭い文章を書く秘訣を学ぶこともできます。文章の書き方についての本を読むことも勧められます。人文科学は広い領域の分野ですから、どの分野にも共通に使える解説書をあげるのはむずかしいことです。しかし、文章を書くということがどのようなことかを具体例で教えてくれる本として薦めたい本があります。井上ひさしほか『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』（新潮文庫 い-14-29）は小さな文庫本ながら、作家、井上ひさし氏の知恵を凝縮して見せてくれる本です。

(7) 辞書を手元に

文章を書く場合には手元に辞書を置いておきます。これには漢字を正しく書くということだけでなく、もっと大切な意味があります。たとえば、みなさんは「右」をわかりやすく説明することはできますか。辞書はどのようなことばでも正確に、わかりやすく説明するために心血をそそいでいます。そこから、わかりやすい、切れ味鋭い表現を学ぶことができます。また、「古い」という意味を表す場合、どんな場合でも「古い」で間に合わせてしまうのではなく、その意味によって「古びた」「かび臭い」「年季の入った」「時代がかかった」「前時代的な」「古拙な」など言い分けること大切です。これはどれだけ細かく対象を観察できるか、その人の力の表れです。辞書を使わずに文章を書くのは、嵐の海にボートでこぎ出そうとするのと同じ無謀なことです。船乗りが羅針盤を使って航路を定めたように、私たちも辞書を羅針盤として文章を書くことを心がけましょう。

5 参考文献

総合プログラムにおいては、人文学全般の素養を身に付けることが求められます。ここで、人文学一般と総合プログラムA～E各領域の参考文献を挙げますので、1回生の間に少なくとも各領域2冊は読了してください。様々な分野の文献を読むということは、特にみなさんのように人文学という幅広い分野を研究する上で、非常に重要です。

《人文学一般》

溪内謙『現代史を学ぶ』（岩波書店〈岩波新書〉、1995年）

1991年のソ連崩壊は、戦後日本の学問を支えたマルクス主義の権威失墜を決定的なものにした。とりわけ崩壊が予測できなかったソ連研究者たちへの影響は深刻であった。ソ連史の研究者である著者がこの激動の過程で、「歴史について」思索した副産物が本書である。歴史学に限らず、現代社会にあって学問することの意味を考えさせてくれる。テーマ・史料・文章化と、研究の進め方とそれがもつ意味も的確に記述されている。

須藤健一編『フィールドワークを歩く－文系研究者の知識と経験－』（嵯峨野書院、1996年）

本書は、基本的には文系分野でのフィールドワークの技術や知識に関する入門書である。もう少し具体的にいうと、本書では、日本の社会学、民俗学、文化人類学、文学、歴史学、考古学、言語学、人文地理学などの人文・社

会科学系分野で活躍する38人の各々の国内外での代表的なフィールドワークの事例が、問題意識、目的、方法から研究結果を報告するまでの一連のプロセスを含めて、簡潔にまとめられている。これからフィールドワークに関心を持ち、フィールドワークを通じて資料を収集することを考えている人たちにはおおいに参考になるに違いない。

博報堂生活総合研究所『タウンウォッチング』（PHP研究書、1985年）

一昔以上前に書かれた本書であるが、後のトレンドを手っ取り早く理解するには、本書で指摘されていることも頷ける。肩が凝らずに読める。

月尾嘉男『情報化時代のビジネス領域』（日本放送出版協会〈NHKブックス〉、1987年）

時代を読みにくい「時代」である昨今、現実を冷静に整理してみるとある方向が見えてくる。そんな整理の仕方を読者に与えてくれる著書である。

陣内秀信『都市と人間』（岩波書店、1993年）

都市は、そこに人間が生活しているからこそ都市である。人間の生活は、歴史や風土など長い時間が醸成した土地があってこそ可能になる。これからの都市を考えるには、土地への十分な認識が必要となる。そんなことを考えさせられる著書である。

南風原朝和・市川伴一・下川晴彦編『心理学研究入門－調査・実験から実践まで－』（東京大学出版会、2001年）

調査研究、実験研究、実践研究それぞれの領域における研究方法について、詳細に解説している。

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波新書）

見田宗介『宮沢賢治－存在の祭りの中へ－』（岩波現代文庫）

◆A分野（表現文化系）

人文科学に限らず、研究の理想的手法とはただ一つ、優れた問題提起と研究史におけるその意義の確認を端緒に、徹底した客観的検証と分析を経て、誰もが納得できる結論（新発見）をできるだけ分かりやすく提示するという流れです。みなさんも大学生活を通じ、広く学界に寄与しうる研究テーマの発掘と斬新な結論を発表することが求められます。そうした研究の過程を追体験できる、モデルとなる参考文献をいくつか紹介します。

黒田日出男『謎とき・洛中洛外図』（岩波書店〈岩波新書〉、1996年）

この本からは、文学・史学・美術史学にまたがる多くの先行研究を十全に検討・評価し、それから新たな研究テーマを開拓、学問領域にこだわらない柔軟な姿勢で徹底して資料を検証し、誰もが首肯できる結論を提示する、という人文科学の理想的な研究手法を学ぶことができます。人文科学研究ジャンルの境界は一般に考えられているほど、堅固なものではなく、その越境は何ら特別なものではないことを気付かせてくれます。

佐竹昭広『下克上の文学』（筑摩書店〈ちくま学芸文庫〉、1993年）

日本文学研究に新風を巻き起こした古典的名著です。初出は1967年。それから35年を経た今も新鮮さは一向に失われません。徹底したテキストの読解と、倦むことのない作品への問いかけが、常識を覆し、新たな発見に繋がることを教えてくれる一書です。すでにやり尽くされたと考えられているテーマや作品でも、更に研究が深められる可能性は無限にあることを読者に語りかけ、勇気付けてくれます。

武者小路実篤『人生論』（岩波新書、1938）

人はどのように生きればよいのか、また生きるべきなのか。文学は人間にとってどのような指針を与えてくれるのか。ヒューマニスト武者小路が真摯に語ってくれる。

井上ひさし『自家製文章読本』（新潮文庫、1987）

日本語の面白さや魅力を近代の名文を紹介しながら解説してくれている。文学作品を深く読みたい方、文章が巧く成りたい方必読。

渡辺一夫『寛容について』（筑摩叢書、1972）

人間はどうしたら優しくなれるのか。優しくなるということが人間にとってどうして大切なことなのか。ユマニスト渡辺一夫が、寛容の精神を非寛容な態度や社会と比して論じてくれている。フランス文学研究者で、大江健三郎の指導教授であった著者の名随筆。

作田啓一『個人主義の運命』（岩波新書、1981）

近代の作家たちが自己とどのように向き合い、自己を律して行こうとしたか。作品の中で近代的自我がどのように描かれたか。日本近代文学を〈自我〉の視点から迫り、個人と社会の問題を鋭く抉った一書。

前田 愛『近代文学の女たち』（岩波書店・同時代ライブラリー）

大野 晋『古典を読む 源氏物語』（岩波書店・同時代ライブラリー）

◆B分野（文書史料系）

鹿野政直『歴史に学ぶこと』（岩波書店〈岩波高校生セミナー〉、1998年）

「なぜ歴史を学ぶのでしょうか。本当に大切なことは歴史をみる視点です。自分にとって歴史とは何か、その問いかけをもっていけば、歴史の見方が変わり、教科書だっただけでずっとおもしろくなります」（本書の扉より）。

中村哲編著『歴史はどう教えられているか—教科書の国際比較から—』（日本放送出版協会〈NHKブックス〉、1995年）

「本書は、おもに高校で歴史を教える現役の教師が、世界各国の歴史教科書を手がかりに、「歴史認識とは何か」「歴史教育はどうあるべきか」をみずからに問うてきた、その回答である」（本書の扉より）。高校で「日本史」「世界史」が分かれていたことに疑問を感じたひと、あるいは、何の疑問も感じたことがないひととは是非一読されたい。

近藤孝弘『国際歴史教科書対話：ヨーロッパにおける「過去」の再編』（中央公論社〈中公新書〉、1998年）

ヨーロッパで行われている歴史教科書を通じた国民国家間の対話を紹介したこの著作を通じて、国民史的な歴史および歴史教育の意味を考える。

イアン・ブルマ著、石井信平訳『戦争の記憶；日本人とドイツ人』（TBSブリタニカ、1994年）

日本とドイツの戦争犯罪に関する戦後処理問題を扱ったこの著作を通して、過去を記憶することの意味、国際化された社会の中で歴史を理解することの意味を考える。

高橋哲哉『戦後責任論』（講談社、1999年）

近年、特に戦後50周年を境に、戦争責任問題で活発な議論が展開されているが、この著作を通してこの問題の意味を探る。

溪内 謙『現代史を学ぶ』（岩波新書）

成田龍一著『「歴史」はいかに語られるか』（NHKブックス、2001）

◆C分野（フィールドリサーチ系）

市川健夫『フィールドワーク入門—地域調査のすすめ—』（古今書院、1985年）

「景観を観察するだけで、様々な地域の実像を認識できる手法を体得できる」地理学のおもしろさを平易に解説していて読みやすい。

ピーター・ゲールド著、杉浦・二神／矢野・立岡・水野訳『現代地理学のフロンティア（上）／（下）』（地人書房、1989／1994年）

地理学とは何か？という素朴かつ本質的な疑問を誰もが持つことであろう。その答えを探すには、これら2冊の本を通読されることを薦めたい。本書は、多様な研究対象・方法を有する地理学について、主に1950～60年代以降に展開した計量革命後の研究トピックをわかりやすく紹介した入門書である。地理学以外の人を対象に書かれた書物でもあるので、あまり関心のない人にもお勧めである。

川口慧海著、高山龍三校訂『チベット旅行記』（1904年。講談社〈講談社学術文庫〉、1978年）

本書の筆者である川口慧海は、明治時代、東京の五百羅漢寺の僧であった。彼は、大藏経の原典を求めて単独で、それも徒歩でインドから鎖国中のネパールを経て、目的地のチベットに至った。本書には、旅の過程で見聞したことがたいへん客観的にまとめられている。本書は民族誌としてもひじょうに高い評価を得ているが、フィールドワークを志す人たちには、川口慧海の意志の強さや真摯な態度をおおいに参考にしてほしいものである。

藤巻正己編『生活世界としての「スラム」－外部者の言説・住民の肉声－』（古今書院、2001年）

本書は、文化人類学者、人文地理学者、社会学者、都市計画学者らが各人のフィールドとする国内外のスラム地域でのフィールドワークで収集した施慧要をもとに、外部者が抱いてきたスラム像を再考し、同時にスラム住民の生活の実像を描き出そうとしたものである。本書を通じて、とくに発展途上国（南の世界）で拡大しつつある貧困層・スラムの実像を理解するだけでなく、多様なフィールドワークの仕方をも学べるに違いない。

◆D分野（行動科学系）

町田 健『言語学が好きになる本』（研究社、1999年）

言語学に楽しく入っていけるように、日常のことばに関する素朴な疑問に答えながら解説した本。

町田 健『生成文法がわかる本』（研究社、2000年）

日本語や英語といった違いを超えた、人間の言語一般にあてはまる文法は何か。このような一見難しい問題を、肩のこらない調子で解説した本。理論好きな人向きだが、高校までの英語の知識があれば理解できる。

初山洋介『認知意味論のしくみ』（研究社、2002年）

ことばがどういうときにどういう意味で使われるかに興味のある人向き。

町田 健『日本語のしくみがわかる本』（研究社、2000年）

高校まで教わってきた、国語の時間の文法がおもしろくなかった人でも興味が湧くように書かれている。日本語を母体とする私たちが、いかに文法を無意識に使ってしゃべっているかが実感できる。

中島平三『発見の興奮－言語学との出会い－』（大修館書店、1995年）

学生時代に自分のやりたいことを模索していた著者が、どのようにして言語学に出会い、学問に対する楽しさや知的興奮を体験していったかを述べた本。学者がどうして学問などに夢中になるのか、ことばの問題を通して教えてくれる。

吉村浩一編『特殊事例がひらく心の世界』（ナカニシヤ、1996年）

様々な関心をひく事例をとおして、その背景にある心理学的な概念、理論に着いてわかりやすく解説している。

鹿取廣人・杉本敏夫編『心理学』（東京大学出版会、1996年）

遺伝と環境、学習・記憶、動機付け・情動、感覚・知覚、思考・言語、個人差、社会行動、発達等の心理学領域全般について概説している。

川瀬正裕・松本真理子・川瀬三弥子『これからの心の援助』（ナカニシヤ、2001年）

心理学の一領域である臨床心理学についての入門書。対象者に対する援助の基本的姿勢、基礎知識、援助の実際、援助の技法について、具体的に解説している。

鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』（岩波新書）

大野 晋『日本語の教室』（岩波新書）

◆E分野（メタ思考系）

トマス・ネーゲル著『哲学ってどんなこと？』（昭和堂、1993年）

はじめて哲学の書物に接する人は、見慣れない用語や独特の言い回しにとまどうことが多い。本書は、そういう特別なことばづかいを一切せずに、哲学の中心問題を読者自身が考えられるようにする、すぐれた道案内。

野田又夫『デカルト』（岩波書店〈岩波新書〉、1966年）

日本のデカルト研究を指導してきた著者が、NHKの連続講座で語った内容にもとづく。デカルト哲学の概説としてこの著者ならではのものであると同時に、現代人が古典との対話をつうじて自らの哲学を形成する一つのあり方を示す。

岡崎・日下部他著『西洋哲学史—理性の運命と可能性—（第2版）』（昭和堂、2002年）

E分野の授業では、2600年の哲学思想の流れをふまえた上で、現代の国際世界の底流をなす思想状況がどのようなものであるか理解することを目指す。本書はギリシアから現代のポスト・モダンまでの哲学を俯瞰している。現代の国際世界を根底において規定している哲学を歴史をふまえて理解する上で、本書は最良の導きとなろう。

ヨースタイン・ゴルデル（須田朗監修／池田香代子訳）『ソフィーの世界—哲学者からの不思議な手紙—』（NHK出版）

丸山真男『日本の思想』（岩波新書）

岡本太郎『今日の芸術』（光文社文庫）

6 テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出するには

総合プログラム所属の学生はテーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出することとなります。提出に関する詳細は以下を参照してください。

1) テーマリサーチ型ゼミナールとは

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバリゼーションを目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習のテーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

2011年度3回生ゼミテーマ

例)「説き方の表現と教育心理学」、「中国映画から現代中国の文化を考える」、「THEMES IN ASIAN STUDIES」

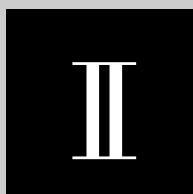
2) テーマリサーチ型ゼミナールにおける卒業論文（卒論形式・非卒論形式）の提出について

テーマリサーチ型ゼミナールでは、従来のような卒業論文の提出（卒論形式）もありますが、クラスによっては、卒論形式に代えて、共同で制作物（成果物）を仕上げ提出する「非卒論形式」もあります。必ずクラス内で担当教員に、いずれかの形式なのかを確認してから作成してください。

◆体裁について

卒論形式で制作の場合	文書体裁	字数：12,000字以上20,000字以下 英文の場合：65ストローク×25行、A4用紙15枚以上30枚以下 ファイル形式・書式・用紙の大きさなど：クラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。
	表紙等に関する体裁	題目、学生証番号、専攻、プログラム、氏名を必ず記載すること。
	その他の注意	学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類はこれに該当しない。
非卒論形式で制作の場合	文書・表紙体裁	体裁についてはクラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。
	その他の注意	1. 制作物（成果物）には題目、学生証番号、専攻・プログラム、氏名を必ず記載するか添付すること。また、審査教員シールを貼付すること（貼付箇所は自由）。 2. 制作物（成果物）とともに、4,000字以上の個人レポートを提出すること。 ※制作物（成果物）と個人レポートの両方を提出して初めて「卒論提出」となる。 ※個人レポートの表紙裏にも審査教員シールを貼付すること。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮称）」を実施することがある。実施日については、担当教員の指示に従うこと。

◆上記の他の提出に関する諸注意は基本的に履修要項の「『卒業論文』の提出について」に従ってください。



科目一覧と履修方法

1 科目一覧

総合プログラム全回生

分野	科目名	配当回生
概説	【*人文総合科学概説Ⅰ・Ⅱ(各2)】	1(2006年度以降入学生) 2(2005年度以前入学生)
講読	【*英書講読入門Ⅰ・Ⅱ(各2)】	1のみ
	#人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ(各2)	2
	#人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ(各2)	3
小集団	【*人文総合科学研究入門(4)】	1のみ(通年)
	【人文総合科学基礎講読Ⅰ・Ⅱ(各2)】	2のみ
	#ゼミナールⅠ(テーマリサーチ)(4)	3のみ(通年)
	#ゼミナールⅡ(テーマリサーチ)(4)	4以上(通年)
	*卒業論文(4)	4以上(通年)

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. *のついた科目は、総合プログラム学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。
5. 人文総合科学概説Ⅰ・Ⅱは2006年度入学より、1回生配当科目となりました。2005年度以前入学生は2回生配当科目です。
6. 【 】のついた科目は、開講していません。

2 履修方法

【総合プログラムで卒業する場合の必修科目・登録必修科目】

必修科目(卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目)

①	ゼミナールⅡ(テーマリサーチ)(4回生以上)	4単位必修
②	卒業論文(4回生以上)	4単位必修

登録必修科目(必ず登録・受講しなければならない科目)

③	リテラシー入門(1回生のみ)	1科目2単位(教養科目)
④	英書講読入門Ⅰ・Ⅱ(1回生のみ)	2科目4単位
⑤	人文総合科学情報処理Ⅰ・Ⅱ(2回生のみ)	2科目4単位(教養科目)
⑥	人文総合科学概説Ⅰ(1回生以上:2006年度以降入学生)	1科目2単位(2006年度以降入学生のみ)
⑦	人文総合科学概説Ⅱ (1回生以上:2006年度以降入学生) (2回生以上:2005年度以前入学生)	1科目2単位
⑧	人文総合科学研究入門(1回生のみ)	4単位
⑨	人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ(2回生以上)	2科目4単位
⑩	人文総合科学基礎講読Ⅰ・Ⅱ(2回生のみ)	2科目4単位
⑪	外国文化講読(第一外国語)(3回生以上)	1科目4単位(人文科学総合講座)
⑫	ゼミナールⅠ(テーマリサーチ)(3回生のみ)	1科目4単位

※3回生時に他専攻へ異動する場合でも、1・2回生時の登録必修は必ず受講しなければなりません。
受講登録方法は履修要項を参照してください。

